
モノクロ

六

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ

【Nコード】

N6126W

【作者名】

六

【あらすじ】

苦しくなどない、辛くなどない、色が無いくらいなんでもない。だって、彼は私のことなど、これっぽっちも求めていなかったのだから――。

「彼女」の目には、町並みも人間も犬も空も、全てが灰色に沈んで見えた。色のない世界、冷めた恋人との仲、無気力な大学生活。そんな状態に特に不満も感じずに淡々と生きてきた彼女は、ある日突然、恋人から別れを告げられる。

自サイトThe fastened winds (<http://>

66snowwing.web.fc2.com/frame.
html)にも置いてあります。

いつからだっただろう。彼女の目には、町並みも人間も犬も空も、全てが灰色に沈んで見えた。

冬の曇りの日、全てのものが彩を失って見えることは、よくある事だ。しかし、四月のある日、彼女はそれに気がついた。家の中でふとつけたテレビから天気予報が聴こえてきた時だ。

——今日は全国的に晴れとなるでしょう。夕方頃から関東地方では雲が出てきますが、雨の心配はなさそうです。気温も前日比+5度以上のところが多く、絶好のお花見日となるでしょう。ごらんください、この青空！きれいですね。ついに本格的な春という感じがします。早くお花見に行きたいです！以上、お天気情報でした。

彼女はそれを背中中で聞きながら、カーテンを開けた。白い光が彼女の顔にかかるが、彼女は特に眩しそうな様子も見せず窓を開けた。ふと彼女は違和感を覚えて空を見上げた。天気予報士の言った、青空、というものは何処にもなかった。ただのつぺりとした薄い灰色の空が広がっているだけだった。曇っているではないか、と彼女は首をかしげて、それから周りを見回した。

カーテンは灰色だっただろうか。窓際に置いてあるアイビーの鉢植えは緑のはずではないか。あそこの車は赤だった気がするが、いつのまに鼠色になったのだろうか。風にそよぐ街路樹の葉も、どう見たって灰色だった。

彼女はゆっくりと瞬きをして、煙草に火をつけた。その火も揺らめく灰色にしか見えなかった。それから携帯電話のメールをチェックして、来ていたメールマガジンを読みもせずに削除した。

彼女には、色がないからと言って大した不都合はなかったのだ。

青い空に飛行機雲が一筋、筆で刷いたようにうつすらと浮かんでいた。陰影の深い雲とその空の青を見て、彼女はああ、夏か、と思う。風が強く吹いて彼女の髪とスカートをなびかせる。

雲の下には高層ビルが黒い影になって連なっている。時折、窓ガラスが光を反射して目を刺した。

夏だというのに彼女は黒いコートの前をしっかりと留めている。眩しい日差しをその黒が全て吸収していて、それがどうしてだか心地よかった。

ふと彼女が町並みの方へ視線をやると、男性が一人、ゆっくりとこちらに近づいてくるところだった。目元は前髪に隠れて表情が読めない。シンプルな白のシャツと黒いジャケット。男性はその胸元に、鮮やかな赤い花束を抱えていた。

全ての色は絵具でべったりと塗ったように陰影がない。雲だけがいやに立体感があつて、触れそうにも見えただのに、近づいてくる男性の顔も服も持つ花も、平面的に見えた。

男性は立ち止まり、彼女に向かって右腕を広げて見せた。おいで、と言っているようにも見えた。風がごうごうと鳴っている。

彼女は男性に向かって一歩踏み出そうとして、ためらった。黒いコートの前をかき合わせると、男性はちよつと首をかしげてみせた。緋色の花が幾本か男性の手から零れ落ちて強い風に流されていった。花の一本が彼女の足元に転がってきた。彼女はしゃがんでそれをつまみ上げようとして、目の前が真っ暗になるのを感じた。彼女は突然足元にあいた大穴に頭から落ちて行つた。

彼女は薄く目を開けた。薄くもやがかかったような視界の中で、彼女は見慣れた天井を見てほっと息をついた。

恋人はすでに起きていた。背を向けて紅茶を飲んでいる彼に、彼女は「おはよう」と静かに声をかけた。彼も少し首をひねって彼女を見、同じように挨拶を返した。

彼女は起き上がって顔をこすった。額を押さえて数秒間考え、今

まで見ていた光景が夢だった事を認識する。あんな鮮やかな色があるのは夢の中だけ、それも彼の部屋で見る夢の中だけだ。

「夢見てた」

「……ふうん？」

彼は数秒遅れてそう返事をした。彼女もそれ以上続けようとはせず、顔を洗いに洗面所へ向かった。

恋人同士の間にある様な甘やかな空気は、彼女と彼の間には無かった。

もとより彼らは好きあっているわけではない——敵意は持っていないにせよ、お互いへの執着というものがない。一年前、彼も彼女も恋人が途切れていて、彼女は彼と共通の趣味を持っていた。それだけだ。

要するに彼女はいわば繋ぎ、代用品である。彼は高校時代から恋人がいなかった時期というものがなかったらしい。その記録を持続しなかったのだらう、多分。彼女は彼女で繋ぎという立ち位置に不満は持っていない。分相応だ、とだけ思っている。

しかし——否、だからこそ、その日の彼の言葉は、彼女にとって晴天の霹靂だった。

「——って人知ってる？」

何気ない口調で彼は言った。彼女はその名前を幾度が反芻し、「知ってるよ」と答えた。直接話した事はないが、顔くらいは知っている。たしか商学部に所属している女性だ。かわいらしくて穏やかで、話してみれば十人に九人は彼女に好感を抱くだらう。誰に聞いてもいい評判しか聞こえてこない。けちのつけようがない人間というものは時々いるものだ。

「あの子とさ、この間授業の後一緒にあって」

「へえ」

「割と仲良くなってごはんとか食べてたんだけど」

「うん」

「告白されて」

彼女は今度は相槌を打たなかった。目線だけで彼に続きを促す。彼はちよつと頷いて、暗記した公式でも言うように言葉を続けた。

「付き合おうかと思うんだけど」

「……えっと、それはつまり、別れてほしいってこと？」

「まあ、そういうこと」

「あー……そう。ふうん」

彼女はテーブルの上のクッキーに手を伸ばし、一口かじってから「一年だっけねえ」と呟いた。

「何が？」

「付き合って」

「ああ。そんならい、多分」

「なんというか、長い事ありますがとうございました」

「こちらこそお世話になりました」

二人は顔を見合わせて少し笑った。彼女が窓の外に目をやると、夕闇の中で雨が降っているのがわかった。

真夜中に彼の家を出て、雨の中をゆっくり歩き出す。それがだんだん歩調が早くなって、気がつけば走り出していた。

傘はどこかで落してしまった。冷たい雨が首筋から背中に落ちて全身に震えが走った。

息が切れる。

「はあっ、はあっ、はあっ、はっ、っく、っ」

吸い込んだ息にむせ込んで、体を折る。暗い世界の中で白い自分の両足だけが浮かび上がって見えた。両手で自分をかき抱く。酷く寒い。黒いコートの襟を必死で会わせて、彼女は瞼を閉ざした。

——知っていたはずなのだ、彼が、本当に私の事を求めているはずがないなんてこと、とうの昔に、知っていたはずなのだ、なのに、どうして、どうして、どうして、こんなに、ちがう、どうして、彼は。

私は代用品なのだ彼女は思う。

彼は彼女を紹介する時、必ず「俺の彼女」と言った——恋人だったといって間違いいではない。セフレなどでは、断じてない。しかし二人は恋人と言うにはお互いに冷めすぎて、それ以下というにはお互いに依存しすぎていた。彼は本当は、「俺の彼女（の一時的な代わり）」と言っていたのだ。

目をぐつと閉じると瞼の上を、首筋を、足を、雨が彼女を濡らす冷たさがより強くなった。

私は汚い、と彼女は思う。雨がどんなに体を洗い流そうとも、肌にしみついた、代用品で構わないという心が何よりも私を汚くしている。肌を全部切り裂いて移植して捨ててしまいたい。

私は汚い、と彼女は叫ぶ。叫んだと思ったのに強い雨がその音をかき消して、叫んだのか思っただけなのか分からなくなつて彼女は膝をついた。濡れた靴下が気持ち悪かった。寒い。その割に頭の内側を誰かがバットで殴つていて、心臓と脳だけが嫌に熱い。彼女は寒さのせいであす赤く染まつた指先に吐息を当てた。

——あす赤く？

彼女ははつとして指先を見つめた。暗くてよく見えないが、指先は確かに、他と色が違う。

彼女は辺りを見回し、アスファルトの間に生える雑草に目を止めた。雨に打たれて萎れてはいたが、彼女がそつとつまみあげると、確かにそれは緑色をしていた。

しかし指先とその草以外はまだ灰色に沈んでいる。

彼女は商店街の方へ歩き出した。寒さはもう感じなかった。商店街の店はもうほとんどしまっていたが、ひとつ明りの漏れる店を見つけてそこを目指して歩いた。心臓が脈打っているのが肋骨にはつきりとつたわってきた。

そこは花屋だった。ほとんどの花が灰色に沈む中、それらを照らす電球と、ある小さなバケツに入った赤い花だけが彼女の目にもはつきりと色づいて見えた。

掃除をしていた男性がこちらに寄ってきて、「すみません、もう閉店なんです。見ていかれますか？」と聞いた。彼女はその横を通り抜けて、鮮やかな赤い花の前に立った。

夢で見た、あの男性が抱えていた花に、良く似ていた。

夕焼けの色だと思った。あるいは炎の緋色だと。あるいは赤信号の赤だと、あるいは血の紅だと、悪女の引く口紅だと、手紙を呑みこむポスト、背伸びしたマニキュア、野球チームのユニフォーム、熟れたトマト、食パンの上のジャムだと思った。さまざまな赤がまじりあってその花の上に集まり終結していた。

「あの」と店員がいぶかしげに声をかけてくる。この雨のなか傘もささずにやってきた女のことを警戒しないわけがなかった。彼女は店員を振り返って言った。

「これください」

「え？ あ、はい。何本ほど」

「ぜんぶ」

店員はあわてて店の奥に戻り、その花を包装し始めた。彼女はそのあいだずっと、電球の暖かな黄色をした光を見つめていた。

多分、このまま少しずつ色が戻ってくるのだろう——と彼女は思った。そしていつか、何事もなかったかのように世界はすべての色を取り戻すだろう。けれどどうして急に？　そして、どうして色は今まで息をひそめていたのだろうか？

「あの、6500円になります」

彼女は財布を取り出して一万円札を取り出し、店員に手渡した。店員がお釣りを数えるさまがなぜか初めてお使いをする小学生のように見えて、彼女は少し微笑んだ。

お釣りと花を受け取る時に初めて、彼女はその店員の顔をまっすぐに見た。困惑する店員の目は、薄く灰色がかった水色をしていた。冬の朝の空のような色だ、と彼女は思った。

「……………目が」

「え？ あ、僕のですか？」

彼女が頷くと店員は視線を下げて困ったように笑った。

「クォーターなんで。他思いっきり日本顔なのに、カラコンつけてるみたいで嫌なんですけどね」

そう言ってから店員は照れ臭そうに「ありがとうございます」と頭を下げた。彼女は瞬間色が戻ってきた理由を天啓のように理解した。

彼と別れたからだ。

彼と付き合っていたから世界は色を無くし、彼と別れたから世界は少しずつ色を回復しようとしている。

彼女は目の奥が熱くなるのを感じた。涙を店員に見られない内に、と彼女は急いで踵を返した。

「お客さん、傘ないんですか？　よかつたら予備があるんで使われませんか？」

後ろから呼びかけてくる店員の声に、背筋を震わせて立ち止まる。どうしてこんなに驚いているのか自分でも分からなかった。

「……ありがとう、でも——」
「どうぞ」

断ろうとした彼女の目の前にはすでに傘があつた。店員は水色の目を細めて、彼女の手には傘を握らせる。

傘は渋い木賊色をしていた。彼女は目を閉じてひとつ呼吸をし、「ありがとう」と傘を広げた。またどうぞ、という店員の声が遠くに聞こえた。

執着のない交際。愛のない付き合い。それが彼女に何か悪いものをもたらして、何かが色を盗み去っていったのだらう。そう考えると彼女は肺が絞られるような苦しさを感じた。色が無いくらい問題ないと思っていたけど、何だかんだ苦しかったような気がしてきた。しかし赤い花を見つめているうちに、彼女はそれもまた違う気がしてきた。この苦しさは、このどうしようもない無力感は、この一年が苦しかったからではない、と。

「彼と過ごした一年」が自分を苦しめていたという事実が、彼女

には苦しいのだ。彼と付き合っていたことが間違이었다と、それを認めるのが苦しいのだ。

つまり私は、と彼女は泣きたいたような気持で思う。つまり私は、彼の事が好きだったのだ。多分、ある程度、かなり。

彼女があげた泣き声は激しい雨に打ち落されて誰にも聞かれない。彼女は花弁に落ちた涙を指先でぬぐって、こんどは落としてしまわないように、傘と花束を抱きしめて、自分の家へと歩き出した。

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

よろしければサイト The fastened winds (http://666snowwing.web.fc2.com/frame.html) にもおいでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6126w/>

モノクロ

2011年9月12日03時21分発行